



Title	明解系アクセント辞典における4つの漢字で表記される語のアクセント
Author(s)	陳, 曦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 27-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69990
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明解系アクセント辞典における 4つの漢字で表記される語のアクセント

陳 曦

要旨 本稿は陳曦(2017b)に見られた4つの漢字で表記される語の融合・非融合に関する傾向がアクセント辞典全体においても観察できることを確認し、詳細を知るために、明解アと新明解アの全頁を調べたものである。その結果、形態構造が2+2字で、前部も後部も漢語の場合、明解アと新明解アのどちらにおいても、語数が最も少ないのが融合・非融合両方、次いで非融合だけ、そして最も多いのが融合だけ、となった。そして、数の上では融合だけの語が圧倒的に多かった。また、2冊ともに4つの漢字で表記される語（形態構造が2+2）の中で、アクセントの融合・非融合という記載に変化のある語が少ないことが分かった。明解系アクセント辞典2冊の全頁を調べることで陳曦(2017b)の傾向をおおよそ確認できたと言える。

1 はじめに

日本語の複合語には、[チュ[↑]ーゴクミ[↓]ヤゲ]¹（中国土産）[ジ[↑]コボ[↓]ーエー]（自己防衛）のようにアクセントが1つの中高型アクセントに融合する（以下、「融合アクセント」）ものと、[[↑]チュ[↓]ーゴク[↑]ナ[↓]ンブ]（中国南部）[[↑]オ[↓]ーザボ[↑]ーエー]（王座防衛）のように融合しない（以下、「非融合アクセント」）ものがある。

しかし、これまでに筆者が調べた4字漢語の一部にアクセントのゆれ（融合・非融合両方の発音が可能）が観察されている（陳曦2017aなど；例：「官僚養成」の融合アクセント[カ[↑]ンリョーヨ[↓]ーセー]と非融合アクセント[カ[↑]ンリョーヨ[↑]ーセー]）。なぜ1つの語に2種類の発音があるのかについて、陳曦(2017b)では、元々非融合アクセントで発音されていた複合語が融合アクセントへと変化（統一）していく途上にあるため、2種類のアクセントが混在しているのではないかという可能性を提示し、その仮説を検証するために複数のアクセント辞典を比較した。

具体的には、陳曦(2017b)において、NHK系の2冊²と明解系の2冊、計4冊のアクセント辞典の「ア」～「カ」で始まる語（各辞書の約1/5の頁数）を調べた。その結果、どの系列においても4つの漢字で表記される語の中で、アクセントの融合・非融合の記載に変化のある語はあまり多くないことが分かった。また、数少ない記載変化しているものの中に、融合へ向かう記載変化に加え、非融合への記載変化も観察された。さらに、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）でも『新明解日本語アクセント辞典』（2010）でも、4つの漢字で表記される語の中、非融合アクセントの発音を含む語の割合が低いことが分かった。

1 第1章では、陳曦(2017a)などと同様に、角括弧内の表音カナに付けられている記号「[↑]」で上昇、「[↓]」で下降を表わす。

2 『日本語アクセント辞典』（1943）と『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）。

こうした陳曦(2017b)に見られる傾向がアクセント辞典の全頁を調べた場合にも観察できることを確認し、詳細を知るために、今回は『明解日本語アクセント辞典』と『新明解日本語アクセント辞典』の全頁を調べた。

2 方法

2.1 使用辞典

『新明解日本語アクセント辞典』の「序」に「若い人たちの使うアクセントも大幅に取り入れ」であるという説明があることで、記載内容に変化があると考えられるため、以下の2冊のアクセント辞典を使用した。

- ① 明解日本語アクセント辞典 第二版 1981年(初版1958年)
(以下「明解ア」)
- ② 新明解日本語アクセント辞典 CD付き 2010年(新明解日本語アクセント辞典2001年³⁾)
(以下「新明解ア」)

2.2 対象語

2冊のアクセント辞典の中にある4つの漢字で表記されている語とそのアクセント型を抽出した。

前回(陳曦 2017b)と同様、大きな傾向を探るために、まず手始めに語種や形態構造を制限せず、形態構造が2+2字の語だけではなく、3+1字(奥入瀬川)と1+3字(女歌舞伎)の語も併せて抽出した。

そのうち、形態構造が2+2字の語についてみると、前部と後部の語種の組み合わせには以下のタイプがある。

- 1) 前部も後部も漢語⁴ 一国一城 イッコクイチジョー
- 2) 前部も後部も漢語ではない 大和撫子 ヤマトナデシコ
- 3) 前部が漢語、後部が漢語ではない 外国為替 ガイコクカワセ
- 4) 前部が漢語ではない、後部が漢語 秋雨前線 アキサメゼンセン

また、以下、適宜、形態構造が2+2字で、語種の組み合わせが前部も後部も漢語(つまり4つの漢字が全部音読み)の語を分析する場合がある。

なお、省略に関して、次のaのように見出し語である4字語の後に、省略される以前の形とそのアクセントが記載される場合と、bのように省略された形の語が見出し語で、省略される以前の形である4字語がその後にアクセントと一緒に記載される場合は、両方の習得規則が付されているため対象外としたが、c.のような場合は習得規則が1つのみ付されているため対象とする。

- a. ウジシュ^ㄅーイ 宇治拾遺 < ウジシュ^ㄅーイモノガ^ㄅタリ 宇治拾遺物語 →15,12
- b. ローキン 労金 < ロードーキ^ㄅンコ 労働金庫 →10,15
- c. ガクジュツカ^ㄅイギ 学術会議 < 日本学術会議 →15

3 『新明解日本語アクセント辞典』の刊行が2001年で、CDが付いた『新明解日本語アクセント辞典 CD付き』の刊行が2010年。

4 これまで(陳曦 2017a など)筆者が調査した後部要素が状態や動作をあらわす4字漢語はここに入る。

表 1 抽出した語数

	明解ア	新明解ア
抽出語数	3705	3934
共通語数 ⁵	3411	
全収録語数	64000	75000
抽出語数/全収録語数	5.8%	5.2%

また、同じ表記の語ではあるが、読み方が違うことで2つの見出し語としてあがっている場合（例：「黄色人種」[オーショクジ^〴ンシュ]（法則 15）（新明解ア p.97）と、「黄色人種あコーショクジ^〴ンシュ」[オーショクジ^〴ンシュ]（法則 15）（新明解ア p.272）），2つの語として数える。

2.3 抽出した語数

明解アと新明解アから抽出した対象語数などを表 1 に示す。

2.4 記号について

以下、次の記号を使う。

〴 下がり目⁶ き 母音無声化 ガ ガ行鼻音 ・ 切れめ⁷

2.5 複数のアクセントがある場合の順序について

明解アと新明解アは、二通り以上のアクセントがあるものに対し、「標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記」し、「年代的に新しいアクセントや、伝統的で古めかしいアクセントの層の目立つものに限り、((新は…)), ((古は…)), ((もと…))のように示し」ている。

3 結果

3.1 明解アと新明解アにおける融合・非融合両方の語と非融合だけと融合だけの語

明解アと新明解アには、語の後にアクセント習得法則の番号が付されている。アクセントの融合・非融合と最も密接な関係があるのは次の習得法則 97, 98, 99 だと思われる。その解説を下に示す。

97 分離文節 二つ以上の文節を続けて用いられる場合、一つ一つの意味をはっきり表わすように発音すれば、各の文節が分離してそのアクセントどおりに発音される。

98 接合文節 日常の会話では、一つ一つの文節をきり離して発音するよりも、軽く続けて一語のように発音する場合が多い。このように文節が接合される場合には、前部の文節はアクセントどおり発音されるが、後部の文節は特に強調しようとしないうり、次のように

5 明解アにおける表記が4つの漢字であっても、新明解アにおける表記が4つの漢字ではない場合（例：「押込強盗」（明解ア）と「押込み強盗」（新明解ア））、共通語数にカウントしない。

6 明解アと新明解アでは「高く発音する部分」を上線で示し、「次が低く発音される場合」に「〴」が付されている。本稿では便宜上、「次が低く発音される場合」（つまり、下がり目）だけを示す。

7 「連語などアクセントに切れめがある場合には、そこに・を置き、区切り」としている。

表2 文節のアクセントの法則一覧 (秋永一枝(2010)「アクセント習得法則」(106))

	分離文節 (97)	接合文節 (98)	結合文節 (99)
自 縄 自 縛	ジジョー・ジバク (ジジョー(・)ジバク)	ジジョージバク	ジジョージバク
自 由 自 在	ジュー・ジザイ (ジュー(・)ジザイ)	ジュージザイ	ジュージザイ
青 息 吐 息	アオイキ・トイキ (アオイキ(・)トイキ)	アオイキトイキ	アオイキトイキ
白 河 夜 船	シラカワ・ヨフネ (シラカワ(・)ヨフネ)	シラカワヨフネ	シラカワヨフネ
否 が 応 だ も	イヤガ・オーデモ (イヤガ(・)オーデモ)	イヤガオーデモ	イヤガオーデモ
言 わ ぬ が 花	イワヌガ・ハナ (イワヌガ(・)ハナ)	イワヌガハナ	イワヌガハナ
是 が 非 だ も	ゼガ・ヒデモ (ゼガ(・)ヒデモ)	ゼガヒデモ	ゼガヒデモ
飲 ま ず 食 わ ず	アマズ・クワズ (アマズ(・)クワズ)	アマズクワズ	ノマズクワズ
年 が ら 年 中	ネンガラ・ネンジュー (ネンガラ(・)ネンジュー)	ネンガラネンジュー	ネンガラネンジュー
件 の 如 し	クダンノ・ゴトシ (クダンノ(・)ゴトシ)	クダンノゴトシ	クダンノゴトシ

型の変化をおこす場合が多い。(本稿の表2 参照)

- 99 結合文節 まれに慣用句などで、二つ以上の文節が続いて固定した意味を表わすようなものには、いつもひと続きに発音する傾向がある。この場合は、後部の文節が平板式ならば後部の第一拍まで高く、後部の文節が起伏式ならば、後部の文節のアクセントの高さの切れめまで高くなる。特に前部が平板式のものは結合文節となりやすく、全体が中高型になるものが多い。

複合語全体が1つの中高型アクセント(中高型融合)になるかどうかという観点からみると、習得法則の97「分離文節」と98「接合文節」が筆者の言う「非融合アクセント」にほぼ相当し、99「結合文節」が筆者の言う「融合アクセント」にほぼ相当すると思われる。

また、法則15も後部要素が漢字2字の複合語の融合アクセント時の法則となりうる。習得法則15は「後部が漢語二字の結合名詞」である。明解アと新明解アによると、「前部には関係なく、後部によりアクセントが決定される。すべて規則型のみ」だとされる。法則15は後部が中高型であるかにより大きく2種類に分けられる。すなわち、後部が平板型・尾高型・頭高型の語の場合は、「後部の最初の第一拍まで高い」のに対し、後部が中高型である語の場合は、「もとの高さの切れめまで高い」。ただし、前者に関しては、「前・後部とも二拍以下の語には例外が多いが、四拍語は多く平板型になる」と記載されている。つまり、法則15は前・後部とも二拍以下の語以外のものは1単位の中高型アクセントになるとされ、これは筆者の述べる「融合アクセント」にほぼ相当すると思われる。

なお、両辞典において法則97,98,99は「文節アクセントの法則」、法則15は「単語のアクセントに関する法則」という立場をとっているが、4つの漢字で表記されているもの、特に形態構造が2+2字のものに関しては、法則99「結合文節」と法則15「後部が漢語二字の結合名詞」との間で、区別をつけるのは難しいと考えられる。

明解アと新明解アに共通の語で、さらに形態構造が2+2字であり、語種の組み合わせが前部も後部も漢語(つまり4つの漢字が全部音読み)⁸の語が筆者の計算では2456⁹語ある。そのうち、明解アと新明

8 漢字が音読みであるかどうかは、漢字辞典オンライン(<http://kanji.jitenon.jp/>)で当該漢字の項目の「音読み」欄にその発音があるかどうかを調べ、それを判断基準とした。併せて見出し語の後の習得法則も参考にした。両者の判断が異なる場合、当該語における当該漢字は音読みとみなしていない。

解アにおいて、法則 97, 98, 99¹⁰, 15¹¹ の 4 つの法則のうち 1 つ以上が記載されている語の法則の組み合わせと語数を表 3 に示す。そして、①非融合だけ、②融合・非融合両方、③融合だけのように分け、それぞれの語数などをあらためて表 4 に示す。

表 3 明解系における習得法則 97, 98, 99, 15 の組み合わせ
(2 冊共通で、形態構造が 2+2 字で、前部も後部も漢語の語)

	法則	明解ア語数	新明解ア語数	語例	
①非融合だけ 97, 98 のうちの 1 つ以上	a. 法則 97 のみ	4	4	雄蝶雌蝶	オ ¹ チョー・メ ¹ チョー
	b. 法則 98 のみ	115	112	営業停止	エーギョーテーシ
	c. 法則 97,98	149	160	意気投合	イ ¹ キ (・) トーゴ ¹²
	d. 法則 98,97	5	5	一網打尽	イチモーダジン イチ ¹ モー (・) ダジン
	計	273	281		
②融合・非融合両方 97, 98 のうちの 1 つ以上と 99 或は 15	a. 法則 99 が前	32	28	花鳥風月	カチョーフ ¹ ーゲツ カ ¹ チョー・フ ¹ ーゲツ
	b. 法則 99 が後	35	42	永世中立	エーセーチューリツ エーセーチュ ¹ ーリツ
	c. 法則 15 が前 (15,98)	2	2	早期診断	ソー ¹ キシ ¹ ンダン ソー ¹ キシ ¹ ンダン
	d. 法則 15 が後 (98,15)	1	1	千手観音	セ ¹ ンジュカ ¹ ンノン 新はセンジュカ ¹ ンノン
	計	70	73		
③融合だけ	99 のみ	19	20	驚天動地	キョーテンド ¹ ーチ
	15 のみ	1889	1879	愛他主義	アイタシュ ¹ ギ
	計	1908	1899		
合計		2251	2253		

9 形態構造が 2+2 字であるか、語種の組み合わせが前部も後部も漢語であるかについての判断が困難な語を除外した。

10 法則 99c は法則 99 としてカウントしていない。

11 法則 15a,15c,15d は法則 15 としてカウントしていない。

12 明解アと新明解アでは、以下の①②のように 2 種類の発音があると判断したものを、「スペースの節約上」矢印の右のように書くことで示している。(本稿の表 2 参照)

千載一遇 ①センザイイチグー ②センザイイチグー ⇒ センザイ (・) イチグー

自画自賛 ②ジガジサン ②ジガジサン ⇒ ジガ (・) ジサン

本稿ではこれらの表記を「センザイ(・)イチグー」「ジガ(・)ジサン」の形で書きあらわすことにする。

表 4 明解アと新明解アにおける非融合だけ、融合・非融合両方、融合だけの語数
(2冊共通で、形態構造が 2+2 字で、前部も後部も漢語の語)

	明解ア		新明解ア	
①非融合だけ	273	12.1%	281	12.5%
②融合・非融合両方	70	3.1%	73	3.2%
③融合だけ	1908	84.8%	1899	84.3%
合計	2251		2253	

表 4 から分かるように、①②③全体に占める割合を見ると、明解アも新明解アも、②融合・非融合両方が最も低く、①非融合だけがそれに次ぎ、③融合だけが最も高くなる。しかも、融合だけの語のそれぞれの割合は 84.8%と 84.3%と圧倒的に高い。

明解アでは、①非融合だけの語が 12.1%、②融合・非融合両方の語が 3.1%あり、両者を合わせると非融合の発音を含む語が全体の 15.2%を占めている。また、新明解アでは、①非融合だけの語が 12.5%、②融合・非融合両方の語が 3.2%あり、非融合の発音を含む語が全体の 15.7%を占めることになる。

ここから、明解アと新明解アでは（少なくとも、4つの漢字で表記されている語で、さらに形態構造が 2+2 字であり、語種の組み合わせが前部も後部も漢語の語においては）、非融合アクセントの所属語数が少ないことが読み取れる。

3.2 アクセントの記載変化

新明解アと明解アで共通している 4つの漢字で表記されている語は 3411 語で、そのうち、形態構造が 2+2 字の語が 3116 語ある。これらの語の中で、2冊において融合・非融合アクセントのパターンに違いがある項目を表 5～8 に示す。表 5 と表 7 はそれぞれ「非融合へ」と「融合へ」の記載変化である。表 6 と表 8 はアクセント記載が 2冊とも同じだが、アクセントの変化の過程を示す「非融合へ」/「融合へ」の事例である。

習得法則の 97「分離文節」と 98「接合文節」が筆者の言う「非融合アクセント」にほぼ相当するが、もし切れめがある場合の方が切れめがない場合より複合の度合いが低いと考えれば、切れめのない 98の方が複合の度合いが高いと考えられる。となると、法則 97、98、99(15)の順に複合の度合いが強くなることになる。そのため、「百花斉放」のような法則 98 [ヒャㇿッカセーホー] (明解ア) から法則 97、98[ヒャㇿッカ(・)セーホー]への変化(新明解ア)に対しても「非融合アクセントへの記載変化」として扱う。

表 5～8 から分かるように、明解アと新明解アにおいて融合・非融合アクセントのパターンに違いのある項目は非常に少ない。非融合への記載変化 16 例（うち 14 例が前後とも漢語）と非融合への事例 1 例を合わせて 17 例、融合への記載変化 13 例（うち 9 例が前後とも漢語）と融合への事例 8 例（うち 7 例が前後とも漢語）を合わせて 21 例、計 38 例の変化が見られた。ここから、4つの漢字で表記されている語で形態構造が 2+2 字の語においては、融合への記載変化も非融合への記載変化も少なく、融合・非融合についての記述が比較的安定していることが分かる。

表 5 明解系における記載変化——非融合アクセントへ

		明解ア (1981)		新明解ア (2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	営業停止 (99 がなくなる)	エーギョーテーシ エーギョーテ ^ㇿ ーシ	98, 99	エーギョーテーシ	98
2	尾形光琳 ¹³ (古は 98 もある)	オ ^ㇿ ガタ・コ ^ㇿ ーリン	22, 24	オ ^ㇿ ガタ・コ ^ㇿ ーリン 古はオ ^ㇿ ガタ(・)コーリン	22, 24, 27
3	開店休業 (99 がなくなる)	カイテンキューギョー カイテンキュー ^ㇿ ーギョー	98, 99	カイテンキューギョー	98
4	上方贅六 ¹⁴ (98 相当が加わる)	カミガタゼ ^ㇿ ーロク	15d	カミガタゼ ^ㇿ ーロク カミガタゼーロク ^ㇿ	15d
5	最新流行 (99, 98 の順番が逆転)	サイシンリュ ^ㇿ ーコー サイシンリュ ^ㇿ ーコー	99, 98	サイシンリュ ^ㇿ ーコー サイシンリュ ^ㇿ ーコー	98, 99
6	祭政一致 (99, 98 の順番が逆転)	サイセイイ ^ㇿ ッチ サイセイイッチ	99, 98	サイセイイッチ サイセイイ ^ㇿ ッチ	98, 99
7	縦横無尽 (99, 98 の順番が逆転)	ジューオーム ^ㇿ ジン ジューオ ^ㇿ ー(・)ムジン	99, 98, 97	ジューオ ^ㇿ ー(・)ムジン ジューオーム ^ㇿ ジン	97, 98, 99
8	自由自在 (99, 98, 97 の順番が逆転)	ジュージ ^ㇿ ザイ ジュー ^ㇿ ー(・)ジザイ	99, 98, 97	ジュー ^ㇿ ー(・)ジザイ ジュージ ^ㇿ ザイ	97, 98, 99
9	神経過敏 (99, 98, 97 の順番が逆転)	シンケーカ ^ㇿ ビン シンケー(・)カビン	99, 98, 97	シンケー(・)カビン シンケーカ ^ㇿ ビン	97, 98, 99
10	早期診断 (98 が加わる)	ソーキシ ^ㇿ ンダン	15	ソーキシ ^ㇿ ンダン ソ ^ㇿ ーキシ ^ㇿ ンダン	15, 98
11	二律背反 (99 がなくなる)	ニリツ ^ㇿ ハイハン ニ ^ㇿ リツ(・)ハイハン	99, 98, 97	ニ ^ㇿ リツ(・)ハイハン ニリツ ^ㇿ ハイハン	97, 98

13 法則 22 は「姓」，24 は「癒合語の男・女子名」，27 は「複合の人名」である。「尾形光琳」については，2 冊共通の [オ^ㇿガタ・コ^ㇿーリン] は法則 97 に，新明解アの「古」の [オ^ㇿガタ(・)コーリン] は法則 97, 98 に相当すると考えられる。新明解アにおいて，新明解アにおいて，2 形あるうちの最初に記された方は法則 97 で，「古」は 97, 98 の両方がある。つまり，98 がなくなったに相当するということになる。ただし，これは後部要素「光琳」のアクセント変化によるものかもしれない。表 6 の「岡倉天心」もそうである。

14 「上方贅六」については，その前部の「上方」は 2 版とも [カミガタ] [カミガタ^ㇿ] と，後部の「贅六」は 2 版とも [ゼーロク] [ゼーロク^ㇿ] [ゼーロ^ㇿク] と記載されていることから，[カミガタゼーロク^ㇿ] は法則 98 「接合文節」に，[カミガタゼ^ㇿーロク] は法則 99 「結合文節」に似ていると考えられる。

12	任意出頭 (98 が加わる ¹⁵)	ニンイ <u>シュ</u> ットー	15	ニンイ <u>シュ</u> ットー ニッ <u>ン</u> イ <u>シュ</u> ットー	99, 98
13	百花斉放 (97 が加わる)	ヒヤッ <u>ツ</u> カセーホー	98	ヒヤッ <u>ツ</u> カ(・)セーホー	97, 98
14	百家争鳴 (97 が加わる)	ヒヤッ <u>ツ</u> カソーメー	98	ヒヤッ <u>ツ</u> カ(・)ソーメー	97, 98
15	老少不定 (98 が加わる)	ローショーフ <u>ッ</u> ジョー	99	ローショーフ <u>ッ</u> ジョー ローショーフジョー	99 ¹⁶ (99, 98?)
16	和洋折衷 (97 が加わる)	ワヨーセ <u>ッ</u> ツチャー ワヨーセツチャー	99, 98	ワヨーセ <u>ッ</u> ツチャー ワヨーセツチャー ワッヨー(・)セツチャー	99, 98, 97

表 6 明解系における非融合アクセントへの事例(アクセント記載が 2 冊とも同じ)

		明解ア (1981)		新明解ア (2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	岡倉天心 (古は 98 もある)	オカッ <u>ク</u> ラ・テッ <u>ン</u> シン 古はオカッ <u>ク</u> ラ(・)テンシン オカクラテッ <u>ン</u> シン	22, 24, 27	オカッ <u>ク</u> ラ・テッ <u>ン</u> シン 古はオカッ <u>ク</u> ラ(・)テンシン オカクラテッ <u>ン</u> シン	22, 24, 27

表 7 明解系における記載変化——融合アクセントへ

		明解ア (1981)		新明解ア (2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	青息吐息 (古は 97 もある)	アオイ <u>キ</u> トッ <u>イ</u> キ アオッ <u>イ</u> キトイキ	99, 98	アオイ <u>キ</u> トッ <u>イ</u> キ 古はアオッ <u>イ</u> キ(・)トッ <u>イ</u> キ	99, 98, 97
2	有象無象 (97 がなくなる)	ウゾーム <u>ッ</u> ゾー ウゾッー (・) ムッゾー	99, 98, 97	ウゾーム <u>ッ</u> ゾー ウゾッー ムゾー 古はウッゾームゾー	99, 98
3	一寸法師 ¹⁷ (新は 99 相当)	イッスッ <u>ン</u> ボシー イッスンボッーシ	15	イッスッ <u>ン</u> ボシー 古はイッスッ <u>ン</u> ボシ 新はイッスンボッーシ	15

15 法則 98 の[ニンイシュットー]が加わる他, [ニッンイシュットー]というアクセントの法則が 15 から 99 になっている。

16 「老少不定」については, その前部の「老少」は明解アに記載がなく, 新明解アには[ローショー]と記載されているが, 後部の「不定」は 2 版とも[フジョー]と記載されていることから, 新明解アの[ローショーフジョー]は法則 98「接合文節」の可能性が高いと思われる。つまり, 実は新明解アのこの語の法則は「99, 98」なのではないかと考えられる。

17 「一寸法師」については, その前部の「一寸」はこの 2 版とも[イッスッ]と記載されていることから, [イッスッンボシー]は法則 98「接合文節」に, [イッスンボッーシ]は法則 99「結合文節」に似ていると考えられる。

4	景気変動 (99 が加わる)	ケーキヘンドー	98	ケーキヘンドー ケーキヘ ^ン ドー	98 ¹⁸ (98, 99?)
5	四面楚歌 (99 が加わる)	シ ^ン メン(・)ソ ^ン カ	97	シ ^ン メン(・)ソ ^ン カ シメンソ ^ン カ	97, 99
6	睡眠不足 (98, 99 の順番が逆転)	スイミン ^フ ソク スイミンブ ^ン ソク	98, 99	スイミンブ ^ン ソク スイミン ^フ ソク	99, 98
7	生産過剰 (99 が加わる)	セーサンカジョー	98	セーサンカジョー セーサンカ ^ン ジョー	98, 99
8	全会一致 (99 が加わる)	ゼンカイイチ	98	ゼンカイイチ ゼンカイイ ^ッ チ	98, 99
9	鶴屋南北 ¹⁹ (99 相当が加わる)	ツル ^ン ヤ・ナ ^ン ボク	22, 23	ツル ^ン ヤ・ナ ^ン ボク ツルヤナ ^ン ボク	22, 23, 27
10	難行苦行 (97 がなくなる)	ナンギョーク ^ン ギョー ナ ^ン ギョー・ク ^ン ギョー	99, 97	ナンギョーク ^ン ギョー	99
11	新田義貞 ²⁰ (98 相当が加わる)	ニ ^ッ ッタ・ヨ ^ン シ ^ン サ ^ン ダ	22, 24c	ニ ^ッ ッタ・ヨ ^ン シ ^ン サ ^ン ダ ニッタ(・)ヨ ^ン シ ^ン サ ^ン ダ	22, 24c, 27
12	認識不足 (99 が加わる)	ニンシキ ^フ ソク	98	ニンシキ ^フ ソク ニンシキブ ^ン ソク	98, 99
13	山辺赤人(明解ア) 山部赤人(新明解ア) ²¹ (98 相当が加わる)	ヤ ^ン マベノ・アカ ^ン ヒト	22, 24	ヤ ^ン マベノ・アカ ^ン ヒト ヤマベノアカ ^ン ヒト	22, 24, 27

表 8 明解系における融合アクセントへの事例(アクセント記載が 2 冊とも同じ)

		明解ア (1981)		新明解ア (2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	一攫千金 ²² (99 相当が加わる)	イッカ ^ク (・)センキン 新はイッカ ^ク セ ^ン キン	39	イッカ ^ク (・)センキン 新はイッカ ^ク セ ^ン キン	39
2	一刻千金	イッコ ^ク (・)センキン	39	イッコ ^ク (・)センキン	39

18 「景気変動」については、その前部の「景気」は 2 版とも[ケーキ]、後部の「変動」は 2 版と[ヘンドー]と記載されていることから、新明解アの[ケーキヘ^ンドー]は法則 99「結合文節」だと思われる。つまり、実は新明解アのこの語の法則は「98,99」なのではないかと考えられる。

19 注 9 で述べたように、法則 22 は「姓」、27 は「複合の人名」である。そして、法則 23 は「単純語・転成語の男・女子名」である。「鶴屋南北」の[ツル^ンヤ・ナ^ンボク]は 97 に、[ツルヤナ^ンボク]は 99 に相当すると考えられる。

20 「新田義貞」の[ニ^ッッタ・ヨ^ンシ^ンサ^ンダ]が 97 に、[ニッタ(・)ヨ^ンシ^ンサ^ンダ]は 97, 98 に相当すると考えられる。つまり、98 が加わったに相当する。ただし、これは前部要素「新田」のアクセントの変化によるものかもしれない。

21 「山辺赤人/山部赤人」の[ヤ^ンマベノ・アカ^ンヒト]は 97 に、[ヤマベノアカ^ンヒト]は 99 に相当すると考えられる。

22 法則 39 は「量語的な数詞 その他」である。「一攫千金」の[イッカ^ク(・)センキン]は 97, 98 に、「新」の[イッカ^クセ^ンキン]は 99 に相当すると考えられる。同表の「一刻千金」もそうである。

	(99 相当が加わる)	新はイッコクセ ^ン キン		新はイッコクセ ^ン キン	
3	嵯峨天皇 ²³ (新は 99 相当)	サ ^ㇰ ガテンノ ^ー 新はサガテンノ ^ㇰ ー	94	サ ^ㇰ ガテンノ ^ー 新はサガテンノ ^ㇰ ー	94
4	白河夜船 (新は 99)	シラ ^ㇰ カワ(・)ヨフネ 新はシラカワヨ ^ㇰ フネ	97, 98, 99	シラ ^ㇰ カワ(・)ヨフネ 新はシラカワヨ ^ㇰ フネ	97, 98, 99
5	神武天皇 (新は 99 相当)	ジ ^ㇰ ンムテンノ ^ー 新はジンムテンノ ^ㇰ ー	94	ジ ^ㇰ ンムテンノ ^ー 新はジンムテンノ ^ㇰ ー	94
6	千手観音 (新は 15)	セ ^ㇰ ンジュカンノ ^ン 新はセンジュカ ^ㇰ ンノ ^ン	98, 15	セ ^ㇰ ンジュカンノ ^ン 新はセンジュカ ^ㇰ ンノ ^ン	98, 15
7	仁徳天皇 (新は 99 相当)	ニ ^ㇰ ントクテンノ ^ー 新はニントクテンノ ^ㇰ ー	94	ニ ^ㇰ ントクテンノ ^ー 新はニントクテンノ ^ㇰ ー	94
8	明治天皇 (古は 98 相当)	メ ^ㇰ ージテンノ ^ㇰ ー 古はメ ^ㇰ ージテンノ ^ー	94	メ ^ㇰ ージテンノ ^ㇰ ー 古はメ ^ㇰ ージテンノ ^ー	94

4 まとめ

今回は陳曦(2017b)に見られた 4 つの漢字で表記される語の融合・非融合に関する傾向がアクセント辞典の全頁を調べた場合にも観察できることを確認し、詳細を知るために、明解アと新明解アの全頁を調べた。

その結果、形態構造が 2+2 字で、前部要素と後部要素が漢語である語は、明解アと新明解アのどちらにおいても、融合・非融合両方が最も少なく、次いで非融合だけ、融合だけ、という順に語数が多くなった。また、融合だけの語が数において圧倒的に多かった。換言すれば、非融合アクセントを含む語が少ないという結果となった。これは、前回(陳曦 2017b)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016)と新明解アのそれぞれ 1/5 の分量を検討した際に見られた傾向が、今回明解系の 2 冊の全頁を調べることでおおよそ確認できたと言える。

また、今回調べた明解系の 2 冊に掲載されている 4 つの漢字で表記される語(形態構造が 2+2 字)の中には、アクセントの融合・非融合という記載に変化のある語が少ないことが分かった。数少ないアクセントの記載変化の中に、融合への変化に加え、非融合への変化も観察された。この点に関しても前回同様、明解アの 1958 年から新明解アの 2001 年の 40 年間ぐらいではアクセントの記載に変化がなくても全く不思議はないと思われる。また、辞書は規範を示すことが目的であるため、辞書におけるアクセントの記載が発音の実態を反映しているとは限らない。例えば、一番多く発音されるアクセントが 1

23 法則 94 は「人名及び一般名詞などについて意味をそえるもの」である。「天皇」など、「職名・称号の類のつくもの」については、「前の語が平板式なら接尾辞のアクセントの高さの切れめまで高い。前の語が起伏式の場合ならば前の語のアクセントを生かすが、接尾辞が起伏式の場合で慣用のもの一般、及び若い人人の間では、接尾辞の高さの切れめまで高い型で発音する傾向がみられる」という。「嵯峨天皇」の[サ^ㇰガテンノ^ー]は法則 98 に、「新」の[サガテンノ^ㇰー]は法則 99 に似ていると考えられる。同表の「神武天皇」「仁徳天皇」もそうである。「明治天皇」については、[メ^ㇰージテンノ^ㇰー]は 99 に、「古」の[メ^ㇰージテンノ^ー]は 98 に似ていると考えられる。

番アクセントとして採用されるとは限らないため、実際のアクセントの融合・非融合の変化はこうした辞書における記載の変化より多い可能性がある。

今後は NHK 系アクセント辞典も調べると共に、アクセント辞典における前後のアクセント型の組み合わせと融合・非融合との関係も含めて検討していきたい。

参考資料

秋永一枝（編）（1981）『明解日本語アクセント辞典 第二版』三省堂.

秋永一枝（編）（2010）『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』三省堂.

陳曦(2017a)「後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語のアクセント融合問題—統語的關係と意味の視点から—」『言語文化学 26』3-16, 大阪大学言語文化学会.

陳曦(2017b)「アクセント辞典から見る4字漢語で表記される語のアクセント—NHK系2冊と明解系2冊の『ア』～『カ』で始まる語を例に—」『言語文化プロジェクト2016音声言語の研究11』37-47, 大阪大学言語文化研究科.

漢字辞典オンライン <http://kanji.jitenon.jp/>